

土壌作物栄養学 1

植物の生育と土壌

筒木 潔

<http://timetraveler.html.xdomain.jp/lecfile.html>

植物生産に関わる学問と土壌作物栄養学の領域

生産技術	食用作物学、飼料作物学、工芸作物学、園芸学、造園学、造林学
栽培環境技術	土壌学、植物栄養学、肥料学、農業気象学
生産基盤技術	農業土木学、農業機械学
作物保護技術	植物病理学、害虫学、雑草学
作物育種技術	作物育種学、遺伝子工学、植物遺伝生態学、生物工学



テンサイ(2012.09.22)



放棄畑の雑草群落
オオアワダチソウとエゾミヤコザサ

Wild grasses in abandoned upland field



Dwarf bamboo, Miyakozaasa Solidago gigantea

クサヨシの小群落

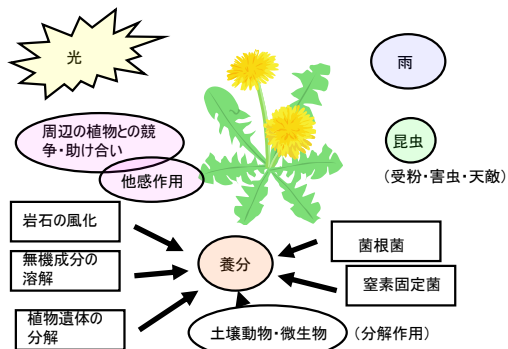


Small patch of Phragmites australis

自然の植物と作物の比較

	自然の植物	作物
多様性	他の動植物と共存	他の動植物を排除
養分	自然の地力	肥料
病害虫との関わり	生態系のバランス	農業(予防・駆除)
エネルギー	太陽エネルギー	化石エネルギー
生産物	その場で分解消費	外部で消費
遷移	あり	なし
人間の関わり	小~大	非常に大

自然の植物の育ち方



作物の育ち方



耕地の作物生産力

- 土壌の機能
 - a) 養分供給
 - b) 水分の保持・供給
 - c) 根の生育環境
- 気象条件
- 地形
- 施肥管理
- 栽培技術
- 作物の種類や品種

土壌作物栄養学が扱う領域

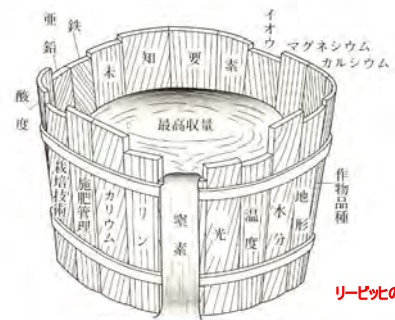


図13-1 ドベネックの要素樽

(奥田, 1968)

作物の生産には多様な要因が関わっている。

作物の生育にとって 必須なものは？

水

空気 (酸素と CO₂)

養分

光

熱 (温度)

土は必須でないのか？

土が作物に供給するもの

- 水
- 空気 (酸素と CO₂)
- 養分 生育ホルモン
- × 光
- 熱 (保温)
- 根の支持体

土の機能を高めるもの

- 土壌有機物
 - 養分供給 水分保持 ホルモン作用
 - 保温 土のやわらかさ
- 粘土鉱物
 - 養分保持 団粒形成
- 微生物
 - 有機物分解、養分供給、病原菌との拮抗

作物の生育にとって有害なもの

- 極端な酸性、アルカリ性、遊離アルミニウムイオン
- 極端な高塩類濃度
- 硫化水素・鉍毒成分
- 重金属
- 土壌病害微生物・寄生センチュウ
- 土壌の堅さ
- 干ばつ

有害要因がないことも作物生育の条件
土が作物の生育阻害要因になることもある。

土壌の役割

土壌の役割は？

土は作物生産にとって必須か？

土の代わりになるもの:

微生物 → 農薬、肥料

有機物 → 肥料

土壌 → 栽培装置、レキ、
ロックウール、ウレタン、水
→ 養液栽培

養液栽培のメリット

季節にとらわれない。

均一な生産物を得られる。

雑草・病害虫の防除が不要ないし簡単

収量が高い。衛生的。

養液栽培の問題点

病原菌の感染に弱い。被害が急速に広がる。

有機廃棄物を分解・利用できない。循環の不完結。

設備に多額の経費がかかる。

かけながし養液による環境汚染

養液栽培の問題点2

- 養分の過剰吸収(窒素過剰は品質低下をもたらす。健康にも良くない。)
- 微量養分の過不足(生育ばかりでなく、食品として必要な微量元素の量は十分知られていない)

土耕栽培のメリット

必要な養分が土壌から供給される。

栽培方法が簡単で安定生産が可能。

経費が少ない。

微生物による病害抑制。

土耕栽培のメリット2

- 作物へのストレスが、高品質な生産物をもたらすこともある。
- 水分ストレス → 糖分・ビタミンに富んだ作物
- 土がないとできない作物もある。(根菜類)

土耕栽培の欠点

土地・土壌の性質・季節・天候の制約を受ける。

同じ栽培法をしても同じ作物が得られない。

雑草・病害虫の防除が大変。

土壌(固体部分)の役割

水分の保持と供給

空気保持と供給

植物の体を支える。

養分の供給 (風化による養分放出)

養分の保持 (粘土の陽イオン交換能)

物理性への貢献 (団粒構造 水分保持)

土地および土壌に依存した農業が必要な理由

土壌の総合性

代替技術のリスクとコスト

(安定性・安全性・経済性)

作物の土壌への適応

物質循環の場

地力とは？

- 植物を生産しうる土壌の能力のこと (土壌の事典)
- 作物収量のうち、土壌の担っている部分 (山根1981)
- 土壌の性質に由来する農地の生産力 (地力増進法1984)
- 作物の根を支える条件を備え、その根を通して水分と養分を作物に供給する土壌の能力 (岡島1976)

→ 地力は不変のものか？

土壌肥沃度 (地力) とは

地力I 自然のままの地力

地力II 養分が円滑に作物の根に吸収されるような環境条件を確立することによって発現する地力

地力III 作物生産を維持・増強するために必要な養分の量および質を確保することによる地力

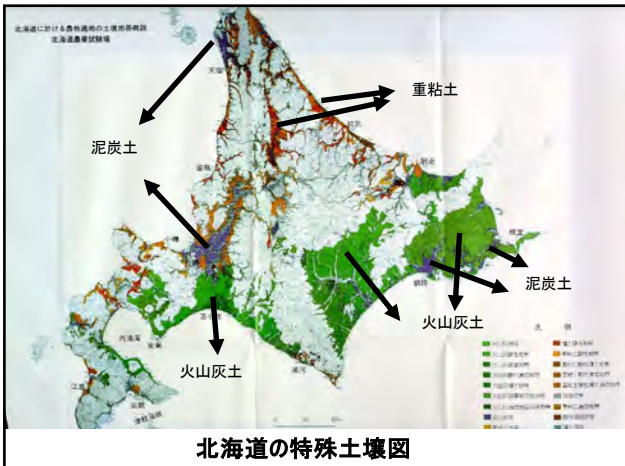
菊地晃二による定義

地力II を発現する技術

1. 基盤整備 風食・湿害・旱害の防止
2. 土層改良 混層耕・心土肥培耕・改良反転客土
3. 土壌改良 酸性改良・アルミニウム活性の抑制・有機質資材

地力III を発現する技術

1. 施肥管理
2. 有機物管理
3. 作付体系（輪作）



十勝のバケツ地 火山灰土

- 穴の開いたバケツのように水や養分が抜けていってしまう。
- お化けのように悪い土
- 戯曲「火山灰地」（久保栄著）に出てくる言葉

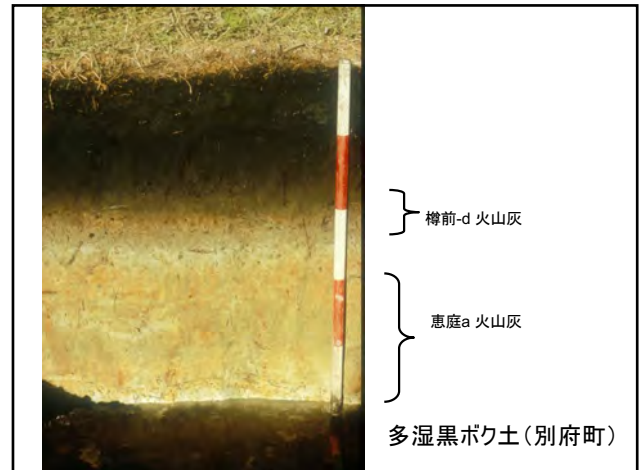
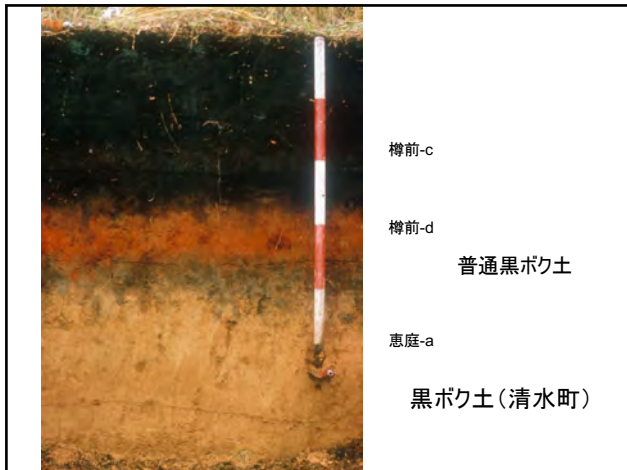
乾燥した台地の黒ボク土

かつてのバケツ地は

- 現在では十勝の作物生産を支える母なる大地
小麦、小豆、じゃがいも、ビート
- その要因：
- 酸性の改良
 - リン酸の補給
 - 効率的な施肥（肥料切れの良さ）
 - 除礫（れき）
- 他にも 品種改良、機械化、病虫害雑草防除技術

帯広畜産大学内の黒ボク土断面





十勝の多湿クロボク土

- 水分過多 → 湿害
- 酸性が強い
- リン酸を固定しやすい

暗きよ・明きよ排水
土層の反転
酸性の改良 → 高い生産性

火山灰土の抱える問題

- 酸性が強い。
- 活性のアルミニウムが毒性を示す。
- リン酸が土壌に強く吸着されるため、植物に有効なリン酸の濃度が低い。
- 窒素や塩基などの自然肥沃度成分に乏しい。
- 「黒ボク土」における土壌の乾燥。
- 「多湿黒ボク土」における湿害。

火山灰土の長所

- 土が柔らかく耕しやすい。
- 多量の腐植が施肥した養分を保持する。

十勝の土壌が直面する諸問題

- 土壌 pH の低下
- 物理性の悪化
- 土壌浸食
- 家畜糞尿処理

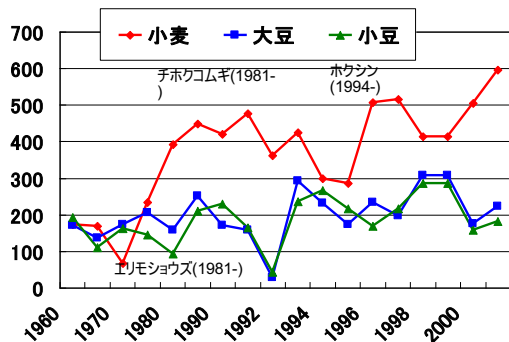
火山灰土の改良技術(1) 基盤整備・土層改良

- ・ 混層耕、改良反転客土耕、心土肥培耕などの土層改良。
- ・ 暗渠や明渠の敷設による排水改良。
- ・ 有機物施用による地力の向上。
- ・ トラクターによる深耕。

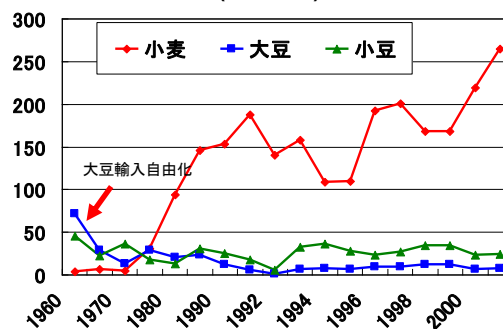
火山灰土の改良技術(2) 土壌改良

- ・ 土壌調査・土壌診断による改良目標、改良方法の策定。
- ・ 石灰資材による土壌酸性の改良
- ・ リン酸質肥料や土壌改良材の多投によるリン酸肥沃度の改善。
- ・ 3要素 (N, P, K) 肥料の施用による養分不足の解消。

十勝における小麦と豆類の反収 (kg/10a)



十勝における小麦と豆類の収穫量
(千トン)



肥沃度に関する考え方の変化

- ・ **自然肥沃度よりも管理しやすい土地であることが重要になってきた。**
- ・ **肥料・肥効を調節しやすい土壌**
- ・ **農業機械で作業しやすい土壌**
- ・ **水管理しやすい土壌**

自然肥沃度が高すぎて困る点

- ・ 無限伸育型の豆類は、茎が条件さえ良ければ、ズツと伸び続ける。
- ・ 自然肥沃度の高い沖積土(低地土)では、生長がいつまでも続き、結実もそろわない。
- ・ 自然肥沃度が低く、養分を肥料によって調節できる土壌では、結実の時期をそろえることができるので、収穫および出荷に都合がよい。
- ・ 十勝の黒ボク土は、豆類の栽培に適している。

品種改良による土地の価値の転換 (国際稲研究所)

- 多収稲の開発 (草形、肥料応答の改良)
→
- 問題土壌で生育する稲の開発
- 耐塩性・耐酸性
- 耐要素欠乏(亜鉛・鉄・ホウ素)
- ⇒ 未利用の荒地を沃野に
- ⇒ 飢える人々に食料を

持続可能な開発

- 短期的に農業生産性の増大が得られても、それが持続性を伴わないものや環境に対して害を及ぼすものであっては意味がない。

農業と自然環境の共存。
在来循環型農業の見直し。